

色

IRO

は

WA

匂

NIO

へ

E

ど

DO



PHOTO SHU FUJIWARA

特集1 藤森 武の世界

特集2 ハウステンボスに見る未来社会

新連載 大師のまねび 連載再会 真言密教への誘い



長崎バイオパーク

最近 動物達と触れあえる

動物園が増えてきました

千葉のマザー牧場や

長崎のバイオパーク

とくにマザー牧場では

牛の乳搾りが出来たり

羊の毛の刈り取りが見られたり

子供達の生きている実感が

どんどん希薄になる今

自分たちの食べる物

着る物がどうして出来るか

体験することが大切です

そしてマザー牧場で飲んだ牛乳は

とてもおいしかった

紙パックの臭いがしない

本当の牛乳の味を思い出しました

地ビールがはやる今

これからは地牛乳や地バターを

見直すよい機会です

鮮度が大切な乳製品で未だに

ナショナルブランドがある国は

少ないと思います

特集

写真家

藤森武の世界

3



日本の心と形

7



現代の道しるべ

9



特集

ハウステンボスに

見る未来都市

11



15

新連載

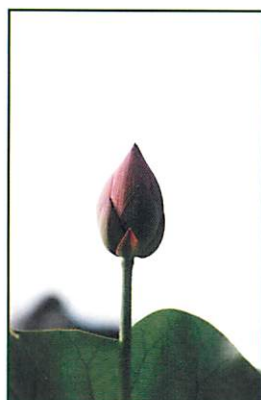
大師のまねび

真言密教への誘い

竹内信夫

16

西宮 紘



新刊紹介

京の古寺から

水野克比古

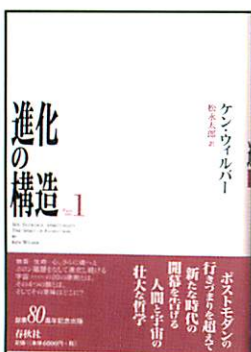
智積院



17

進化の構造

ケン・ウィルバー



進化の構造 ケン・ウィルバー

春秋社



松川二十五菩薩堂 飛天像

宇治平等院には飛天像が鳳凰堂内部に荘嚴されていて軽やかに天空を舞い、極楽往生を願う人々を迎え入れる。

法隆寺の天蓋の鳳凰や天人はいままさに天空から舞い降りてきたような早さを鋭く明快な鑿<sup>の</sup>さばきから浮き上がらせ飛鳥の香りを今に伝えている。

藤森 武の『華の仏』に収められた松川二十五菩薩堂の飛天には、平等院の飛天の軽やかさも、法隆寺の天人の早さもない。

しかし量感あふれるお姿は阿弥陀如来が二十五菩薩と来迎されるときともに天空に舞いたしかな極楽往生を約束する。

けして保存状態の良くないこの飛天も藤森氏の見事な撮影によって再び天を舞う。



日本の歴史も文化も、神仏習合から繙かないと本当の姿が見えない。

この素朴でいながら神々しさをたたえる十一面観音は岐阜・日吉神社の本地仏。

仏教の仏菩薩がその姿を、神々にかえ大衆を救済していく。

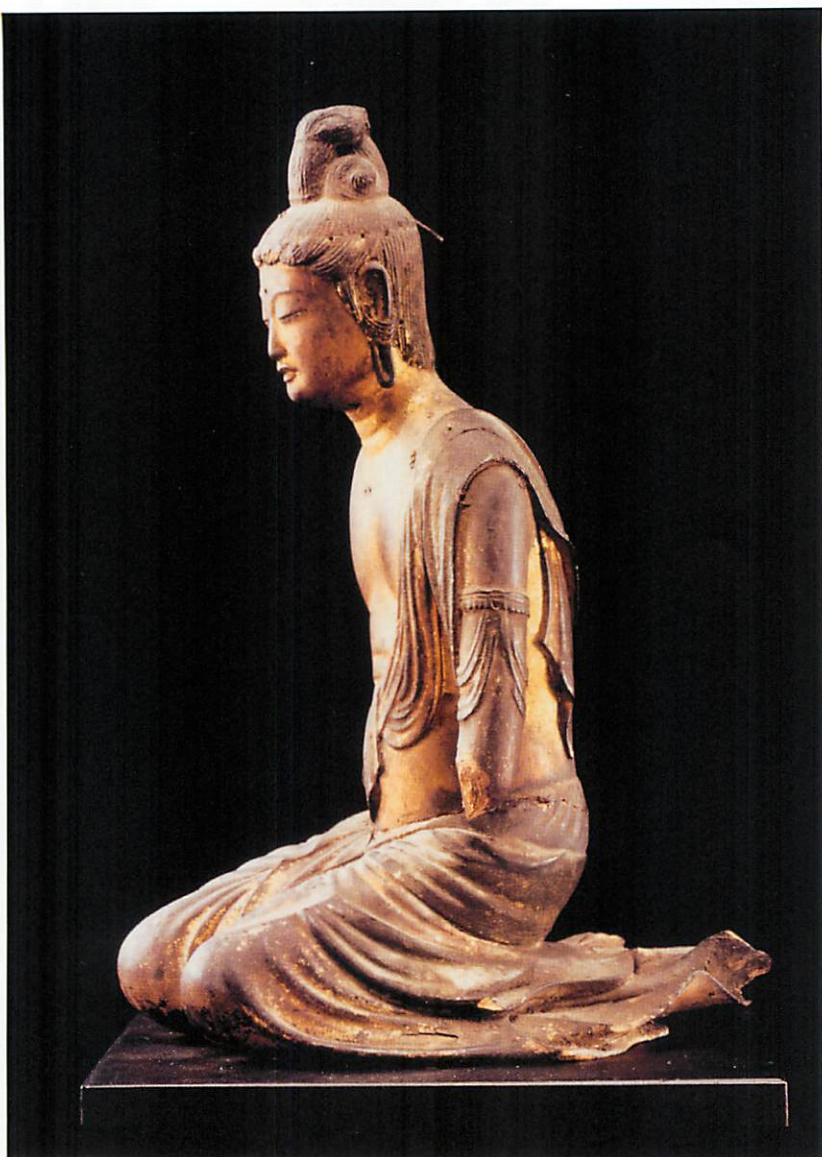
神々は垂迹すいじやく、仏は本地。

仏菩薩のまばゆい輝きをやわらげ日本中の隅々の神々に姿をうつしさらに虚空の一つ一つの小さな塵にまでその輝きを与えた。

『神と仏』に収められた写真  
真はモノトーンで石仏のよ  
うな力強さを出している。

慈恩寺 山形県寒河江市大字慈恩寺鬼越三

左沢線羽前高松駅下車  
あてがわ



十二世紀に東北に華麗な文化を築いた藤原氏の影響は山形にも及ぶ。

慈恩寺のこの菩薩像は美しい金箔が残りお姿をわずかに前に傾けている。

欠損している両の手には蓮の台を携えて死者の往生を導くのだろうか。

慈恩寺の素晴らしい仏像群は、「法華経」を典拠に造られている。

「一切経」を書写し法華経の曼荼羅世界を実在感のある彫像群で現出させた人々の思いが藤森氏の写真によって再現される。



写真家 藤森 武氏が自らのライフワーク  
仏像の写真集が東京美術より出版された。

土門 拳に師事し厳しい徒弟制の中で鍛え  
られた審美眼から仏像彫刻の素晴らしさを  
新たな視点から切り開いていく。

藤森氏は

『獨楽・熊谷守一の世界』講談社

『薩摩切子』

『ガレのガレ エミール・ガレの神髄』

紫紅社

『秘仏十一面観音』平凡社

『国宝・重文の茶室』世界文化社など多く



の美しい写真集を出されているがとくに、  
白州正子さんの一連の著作の写真はすべて  
藤森氏が撮影されている。  
今春出版された

『花日記』も好評の中で版を重ねている。

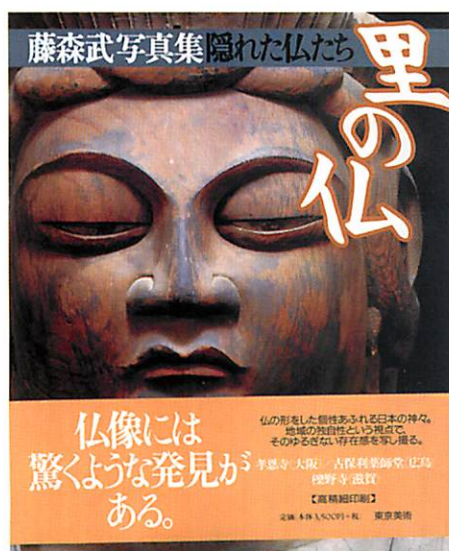
『別冊太陽 北天の秘仏』とともに著した  
田中 恵氏と再びコンビを組み木彫ならで  
はの仏像彫刻の美しさを紹介している。

『華の仏』では

山形・慈恩寺 岩手・松川二十五菩薩堂

大分・真木大堂の仏像を取り上げる。

都の高い技術をもった仏師たちが制作し  
た、地方にある秘められた傑作を紹介する。



それは都から地方へ散華された美しい華であり  
また法華経から導かれる極楽往生への蓮の台か。  
『里の仏』大阪・孝恩寺、広島・古保利薬師堂  
等から都にはない力強い造形美を紹介する。

『神と仏』では奈良・聖林寺、滋賀・向源寺な  
ど多くの美しい十一面観音像を取り上げ、また  
京都・大將軍八神社などの神像を紹介し、日本  
の神仏習合の世界を観音像と神像の中から見い  
だしていく。

今秋には

『山の仏』・『海の仏』が続けて発刊される。

# 日本のこころと形



『京都の茶室に』

外国の友人を月見に招待したとき

笛の名手を招いて

一曲奏でてもらう

外国の友は『移ろいゆく』と

思わず語った』

東京新聞のコラムより

移ろいゆく一瞬、一瞬の

自然の風情を楽しむことは日本の美意識の

原点です

国を超えてその風情が楽しめるのは

嬉しいことです



## 現代の道しるべ

正しい判断力は潔さから



今春テレビで岡田監督の講演を聴いた。講演を聴いて信念があり戦略性のある監督だと思うので彼の話を紹介したい。

### 岡田監督の話

Jリーグが始まった頃の選手はまだまだプロ意識が無く自己管理もできず、朝も起きて来なければ夜は帰ってこない。だから随分首にしました。鹿島アントラーズのジーコ監督はそのことを（プロ意識を）最初からきちつと教えているので、鹿島から来た選手はすぐ使えました。

日本と世界の差は正直に言っています。走る蹴るといった能力ではなく、それは**判断力**です。これは

サッカーだけの問題ではなくて日本全体の問題ですが。

たとえば選手に『相手との間をもっとつめろ』というと抜かれてしまう。『馬鹿野郎なんで抜かれるんだ』という『監督がつめろ』というのでつめたから抜かれました』という。今度は『抜かれないようにしろ』というところも敵と間をあけてプレッシャーをかけられない。そこで『抜かれないようにしかも間をつめろ』そこまでいってはじめて実践的な間合いになる。

新聞でも二律背反の一方に決めて原稿を書きたがる。

『監督、こんどの試合は攻めに行くんですか、守りに行くんですか』

『攻めながら守るんです』

『今度はテストマッチですから勝負にはこだわらずテストするんですね』  
『勝ちにいきながらテストもします』

かならず一方的な記事を作りたがるんですね。

選手には100%やれといまます。練習でも。選手は『練習で100%やるんですか』と必ず聞いてきます。

僕は『運』というのを信じていて、誰にでもどこにでもあると思っていますが、100%やらないうとその『運』が逃げてしまう、それがこわいんです。

韓国戦で2-0で勝ったとき、後半、チャンスボールをシュートせず中へまわしたパスが二本ありました。私は激怒しました。選手は勝てたから良いじゃないですかといいますがそのゆるみが『運』を逃がしたり、敵に行ってしまうことがこわいんです。

ドーハの悲劇がありました、1点リードでハーフタイムを迎えましたが、もう選手は興奮状態で、ワールドカップに行けるといって

監督（オフト監督）の声が全く耳に入らない。結局1点入れられて、ワールドカップに行けなかった。今回のイラン戦も前半1点リードでハーフタイム。選手は冷静でした。

『ちよっと話を聞いてくれ』という全員が目がパツとこちらに向きました。これは行けると思いましたが、後半1-2に逆転されましたが、浮き足立つこともなく最後まで戦い、勝つことが出来ました。前の選手だときっと浮き足立っていたでしょう。100%やって可能性を信じようというキーワードのもとにやってきて、結果はうまく行きましたが勝負は五分五分です。  
神奈川テレビより

一つの試合を勝ちきるということは本当に難しく、相手との力量に圧倒的な差がなければ勝ちきれない。逆に負けない試合をするものは実に強い。双葉山や貴乃花が目指す勝負の世界も負けない相撲だと思う。今

夏場所、千秋楽で貴乃花は曙戦で珍しく勝ちに行つて負けた。勝ちに行けば必ずすきが出来る。真に強い選手は勝ちに行かず負けない試合運びをする。あの信長でさえ勝ちに行つた戦いは桶狭間だけで、ほかの戦いは負けない戦を組み立てている。その典型が武田騎馬軍団を破った長篠の戦いである。

試合を見て岡田監督が狙ったのも負けないゲームだったことが良くわかる。そしてすべての選手が100%の力を出しきった素晴らしい見応えのある試合だった。

岡田監督が監督という地位に固執せず、負ければ自分が責任をとって辞任するという潔さがすがすがしい。

さて参議院選挙がおわり、地位に固執する政治家達が日本の進路をどう判断出来るか。禅に『放てば手に満てり』という言葉もあるが。

# ハウステンボスに見る未来社会



長崎のハウステンボスは今までのテーマパークとは全く違う。

一人の男が一〇〇〇年の夢を賭けた壮大なプロジェクト。

六〇年代初めは豊かな二一世紀の姿が描けたが、今は暗く不安に満ちた未来像しか描けない。

大量生産・大量消費・大量廃棄そのための環境の大量破壊が深刻になり環境ホルモンやダイオキシンが人体や生態系、さらには人間の心まで蝕もうとしている

しかし環境と共存共栄が出来る豊かな未来社会の、一つの答えがここにある。

自然循環型の都市、それがハウステンボスだ。

園内にはチューリップを始め無数の花が咲き誇り、花の香りが旅の疲れもゆったりとやわらげる。

園内にはホテルヨーロッパを始めとする宿泊施設、住宅部分、レストラン、アミューズメント設備が、長さ6キロの水路で繋がれている。

ホテル等で出される生ゴミは、すべてコンポストで再処理され花壇の肥料として再利用される。

水路の地下には共同溝が張り巡らされている。人が住む以上水やエネルギーの供給は不可欠だが、それらはすべて地下共同溝に埋設されている。上下水道、電気、冷暖房のパイプなど、そしてすべての配管をコンピュータで管理し異常があっても観光客に迷惑をかけずに対応が出来る。

阪神大震災で地下共同溝がもつとも被害を受けず都市の復旧も早かったことから考えても、これからの街作りに不可欠だ。



エネルギーは天然ガス。窒素ガスなどを排出しないクリーンな熱源だがコストがかかる。まだ九州には天然ガスのための設備がなく、「ハウステンボス熱供給」という会社を設立し、天然ガスの貯蔵、生産設備を新設している。

さらにコ・ジェネレーションシステムを採用している。これは天然ガスを燃焼させ蒸気圧でタービンを回し自家発電を行う。さらにその排熱を利用して蒸気や冷水をつくり冷暖房に活用できる。



地下共同溝



ハウステンボスとはオランダ語で「森の家」オランダ・ビエアトリクス女王の、今住まわれている宮殿の名前。オランダ政府がこの名称を許可するに当たって一つの条件が出された。「本物を作ること。」

ハウステンボスでは完全にこの条件を実行し美しいオランダの町並みを再現している。

煉瓦の目地の幅が違うというクレームにも誠実に直し、オランダとのより深い信頼を築いた。

園内にいると携帯電話を始めとした電子音が全く聞こえない。

不思議な静けさ。もちろん様々なイベントや観光客の笑い声、子供の声、車の音など聞こえてくるが電子音がしないことと、携帯電話の話し声が聞こえないことがとても心地よい。

『昔の街には、音に対しても光に対しても、作法があった。』ハウステンボスではそれほど光にも音にもこころくばりをしている。



ハウステンボスの水際はすべて石積みになっている。

海と陸の岸辺、運河と岸の水際そこは海と陸の生き物、川と岸の生き物の交流の場。

自然の微妙な調和を保つことも重要な場で、この水際をコンクリートで固めてしまうと、生態系が破壊されてしまう。

今日日本中の美しい海岸線も、国内の多くの河川もコンクリートで固められてしまった。

また諫早湾の干拓事業。  
長良川の河口堰。

特定の業種のみが潤う公共事業はもうやめて、都市には地下共同溝でライフラインを確保し、エネルギーは、コ・ジェネレーション型に転換していくことを公共事業の柱に出来れば日本も変わるだろう。

さらにここで排出される生活水は第三次処理までする。

そしてその排水をさらに木や花に花壇にまき、土に浸透させ自然にしみこませていく。

これによって美しい大村湾を汚すことなく生態系にも影響を与えない都市が完成する。



ハウステンボスの原点、バイオパーク

人と動物の共存を目指し出来るだけ人と動物がふれあえるようになっている。

大師のまねび

竹内信夫

後世の人々に弘法大師と慕われる人物が、本当は、どういう人だったのだろうか？ 自ら沙門空海と署名した人物の息遣いを何とか直接に感じることはできないのだろうか？

あたかも生身の生きた人間と相対するかのように、大師と相向かうことはできないのだろうか？ 空海という日本歴史のなかに巨大な

信仰者としてなら、高野山奥之院の御廟に趣き、そこで静かに心を澄ませば、動く風の気配に大師の汲み尽くせぬ誓願の今になお生きて働いていることを感じることはできる。殊に早朝、まだ誰もいない、早起きの小鳥以外は何も動き出さない時に、しつとりと朝露を含んだ杉林のなかに立てば、誰もがそれを感じるはずだ。しかし、それは私の大師へと向う思い

の描き出す幻影である。生きた一個の人間として、空しいものとわかつていても私が依拠しなければならぬ自分の頭腦に、外からやつて来て、否定しがたい確實さを以て私を納得させてくれる力を、信仰のあの至福の一瞬は与えてくれない。それは一瞬の閃光を発して輝き、悲しくも、現実の生活の圧倒的な混乱と混濁のなかに消えてしまう。私は、しかし、大師と、生のこの混乱と混濁のなかで相まみえてみたい。

今から振りかえって見れば、そのような思いが、私を二つのものの探求に向わせたように思う。一つは、大師の足が踏んだ土地、大師の目が見た光景、大師の耳が聞いた音を、自分の足で踏み、自分の目で見、自分の耳で聞くということ。大師の足跡を追う旅が、こうして、企画されたのである。今なお、私はその旅の途上にある。断片化され、ちぎれちぎれではあるけれども、私の記憶のなかでは一つに結び合わされるこの長い旅は、私の人生と重なり合っている。

もう一つは大師の書いた文章。難解な措辞によつて構成されているその文章は、まるで強固なフアイヤー・ウォールに守られた仮想空間のように、確かに人を容易に近づけさせない。私たちの怠惰はそれを避け、柔らかな光に包まれた伝承と説話の世界に惹かれ易い。しかし、難解な經典の文字に立ち向かつた時の大師と同じ忍耐を以て臨めば、その壁を突き抜けて、一つの一つの文字が織り成す豊かな世界に私たちは入ることができる。

大師が書き残した文章はことごとくが詩である。「詩は志に本づくなり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す」と、『文鏡秘府論』のなかで中国古来の言葉を援用しながら大師が私たちに教えてくれているような意味での「詩」である。大師の文章のなかには、だから、大師の「志」が、大師の「氣」がうごめいている。大師の息遣いをもつとも直接、伝えてくれるのは、ほかでもない、これらの文章なのだと私は確信する。そこにこそ、私たちが

大師と直接に直面できる場がある。

大師の書いた文字を読むこと、それらの文字のなかに大師の心の動きを読みとること。大師の文字と苦闘しているとき、私は大師とともに生きているように思う。それが私流の「大師のまねび」であり、大師探求のもう一つの旅なのである。

それが、気の遠くなるようなのろのろとした歩みの旅であることはもとより承知している。しかし、踏み固めるようにして踏み出す一歩一歩が、確かな大地の感覚と共に、大師の紛うかたなき息吹を私の肌を感じさせてくれる。その時、私は、もはや大師というよそよそしい言葉ではなく、空海さん、とその実の名で呼びかけるほかはない人物が自分の眼前に立っていることを信じていることができる。私は、その人物の発する声を聞き、その人物の発する温もりを感じとる。そして、その人の後を追って、歩みを続けるのである。

# 真言密教への誘い

精神文化史 研究家 西宮 紘

お大師様が真言第八祖となられて第七祖恵果阿闍梨から相伝された正純密教は、お大師様によって体系化がなされ、真言密教として確立されたわけであるが、この膨大にして複雑な体系を理解するのは容易ではない。まして、お大師様の思想は、決して卓上のもではなく、全身全霊をもって修行することを前提におかれ、しかも師から身を持って伝授されねばならないとするために、単に理論的な追求だけでは見極めきれないところが多いのである。それでも、お大師様が書き残されたさまざまな記述を通じて、ある程度の理解は可能なのである。それは、お大師様が極めて理知的な側面を持ちあわせておられ、しかも総合演繹する力に長けておられたからである。

エというフランスの経済学者が、「空海をご存じですか」と問うてこられ、驚いた経験があるが、異国の人で、しかも経済学というまったく畑違いの学者の口から

「空海」の名が出ようとは想像もしていなかったのである。どうやらお大師様は世界的にも注目される存在となつてこられたようである。ということは、お大師様の思想を日本人である私が、まがりなりにも理解しておかねば時流（？）に乗り遅れるということになつてしまふのではないか。しかし、これは容易なことでないというのが実感である。

お釈迦様が仏となられたのは三十五、六歳の時であり、苦行を捨てられてはじめてそれが可能となられたわけだが、お大師様も大学出奔の後、かなりの苦行をなされたようである。第八祖遍照金剛となられたのが三十二歳頃であるから、年齢的にはほぼ似たような時期にさとられたとも考えられる。お釈迦様の思想もお大師様の思想も共に戒・定・慧の上になり立っていることに変わりはないのだが、時

代とともに知的対象（法塵）が増え、複雑化しているだけに、お大師様とてさとられるのは容易ではなかったであろう。

真言密教の体系は、お大師様の主著『秘密曼荼羅十住心論』に述べられている「十住心論」の体系と、『即身成仏義』に述べられている「六大思想」「四種曼荼羅」「三密」の思想、『三昧耶戒序』に述べられている「四種心」がどのように体系づけられているかを見ることと、大悲胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅の各々についての観方とそれらの関係を見ることがよつて、もしもそれができるならばであるが、ある程度は理解することができるのではないだろうか。真言密教の中心的課題は「即身成仏」であるが、お釈迦様が生身のままに仏になられたのであるから、どうしてそれが不可能であるのか、と言うのがお大師様の感慨ではなかったか。

それに、お大師様がさまざまな著作の中でかならず言及される「インドラの珠網」という華嚴の世界の比喩も重要な手掛りであ

る。おそらく「インドラの珠網」をどのように理解するかが一つのキーポイントともなる。これについては全く新しい視点からアプローチしてみるつもりであるが、いずれにせよ、こうした作業を行うには、トリコトミーという特殊な三分法を導入した方が分かり易いのである。

トリコトミーはドイツ語で「三分法」「三分岐」などの意味を持つており、論理における「公定」と「否定」、コンピュータ用語ビットの0か1の選択といったダイコトミー（二分法）に対置されることが多い。故湯川秀樹博士は、さまざまな場で「ダオコトミーではだめだ、トリコトミーでなければ」などと、よく言っておられたが、そのトリコトミーである。真言密教では「身・口・意の三密」あるいは「三寶」（仏・法・僧、「三点」（解脱・法身・般若）などというように、「三」という数は重要な位置を占めているのである。しかもこれは単なる分類法ではないのである。

## 新刊紹介

京の古寺から 撮影 水野克比

淡交社 2000円



京都の古寺を紹介するシリーズ

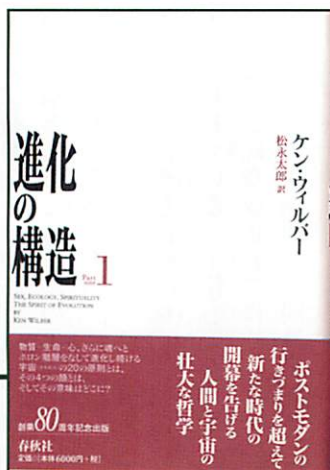
第二期に入り今回は真言宗の学山 智積院

名写真家 水野氏が二年に及ぶ撮影の中から厳選した美しい写真で構成されている。

智積院を知っているものでも、その美しさを再発見できる。近藤隆敬猷下のエッセイ『真言ハ不思議ナリ』は真言宗のよき入門書となっている。

進化の構造 ケン・ウィルバー

春秋社



今、大人も子供も政治家も環境運動家も実は、真の意味も価値も見いだせないでいる。何が善なのか、何が正しいのか。生きる意味を見いだせない子供達は自己を透明な存在と思いまた『大人も子供も平等』という偽善から真の成長の喜びを奪われ心の実在感を求めて叫びだしている。

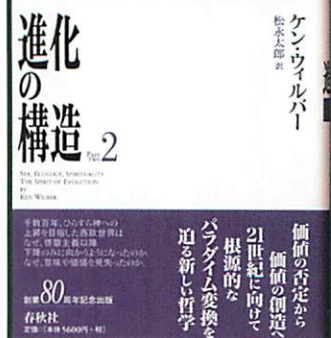
あらゆる価値が見いだせない今、ようやく宇宙と人間との壮大な哲学が語られ始めた。

意識の真のルネッサンスを求めて参禅したケン・ウィルバーは『意識のスペクトル』から20年ついに人類の新しい地平を提示する『コスモス三部作』の第一部『進化の構造』をここに完結させた。

キーワードはホロン。階層をなして進化する宇宙（コスモス）をホロンの20の原則で明確化しさらに4つの象徴で解きあかす。

思想家・政治家・教育者・宗教家・経営者・エコロジストにとっては21世紀への必読書。

なお同じ時期に参禅しチベットに赴いたロバート・サーマンが『INNER REVOLUTION』を上梓した。



## 五木寛之さんへの答えとして

先日プレジデントという雑誌に山田洋二監督と五木さんの対談が掲載されていました。

内容は心の危機の時代について話されていましたが、その中で仏教への批判が書かれていたのでお答えします。

対談の内容は映画の話からアメリカの映画なんかだと遺

体の埋葬シーンでは必ず牧師が亡くなった人の事を語り気の利いた説教をするけど、日本の坊さんからそんな話を聞いたことがない。

一人もいないよね。日本中に、魅力のある坊さんなんて。社会的な活動もしないし。オウムの麻原にはやりカリスマがあつたから多くの若者が入ったわけ……

要約すると以上ですが昨年戯曲『蓮如』が書かれ、舞台『蓮如』の脚本まで書かれた、五木さんが浄土真宗に詳しいのでこの対談は意外でした。

浄土真宗は説教をします。子供の頃から門徒の前で話をさせます。しかしそれは埋葬の場ではありませんが。

私の仲間でも今話をしない僧侶はいません。

通夜の席では亡き人の『徳』や『縁』を偲びながら戒名の意味を説いたり、初七日では四十九日までの意味やその過ごし方が話されるはずですが。

ただそれが一般会葬者の前ではなく近親者が集まる場で話されるので仏教徒でない方や、身近でご不幸が無いと『縁』が無いでしょう。

次に魅力がある坊さんもありいると思いますが、どこに魅力を感じるかは個人差があるので措くとして、問題は麻原のカリスマをいまだに評価する姿勢です。山折哲雄さんは高い霊性という言葉まで使い評価していましたが、ヒットラーにもレーニンにも毛沢東にもカリスマはありました。彼らが、彼らのカリスマがどれほどの不幸を現世にもたらしたかは歴史が実証しています。

最後に社会的活動についてですが阪神大震災には真言宗だけで延べ千人の若い僧侶が駆けつけています。一般的な救援活動をするものも有れば、亡くなった方達を弔うもの、また全国の寺院から義捐金や救援物資を送っています。昨年のナホトカ号の重油流出事故では厳寒の地に赴き重油の回収作業をしています。

日本の歴史の中で明治の廃仏毀釈と戦後民主主義が仏教にネガティブなレッテルを貼り続けているが、そろそろ五木さんのようなマスコミで発言権も発言力もあるオピニオンリーダーが仏教の再発見をされてはいかがでしょうか。

お大師さまの文章にこんな問答が有りますので紹介しましょう。

憂国公子がお大師様と思われる玄関法師に最近の仏教の墮落を嘆き素晴らしい聖者がなぜ現れないかを問います。

玄関法師は

『たとえ麒麟や鳳凰が見えなくなつたからといって動物を絶滅させてはならないし、如意宝珠が見つからないといって鉱物を唾棄してはいけない、世に聖者が出ないからといって仏法を捨ててはならない。』

またこのような時代の人々には誰が賢者で誰が愚者か見極められない。もしかしたら今、優れた逸材がいてもただ私たちが知らないだけで気づいていないだけかも知れない。だからその逸材を捜す努力を惜しんではならない。

そして王たる者は王法を確信し、仏教者はしっかり仏法を見つめていればそれでよい』



PHOTO SHU FUJIWARA

この本はツリーフリーペーパーで作られています  
さとうきびから砂糖を取り出したあとの 残った繊維から作られています

西新井大師 総持寺

〒123-0841 東京都足立区西新井1-15-1/TEL 03-3890-2345/FAX 03-3890-3050

次回発行は 12 月 1 日予定

特集 林屋晴三が語る 茶の湯の世界

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA Special Contributors/RUYUICHI ABE KO FUJIWARA  
Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU EISHIN TAKAHASHI REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA  
HOMEPAGE DESIGN MASAOKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU  
PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158-0082 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第八号 平成十年長月一日発行